

平成28年度 第1回 ひたちなか市子ども・子育て審議会 会議録

開催日時	平成28年6月24日(金) 14:00~15:40
開催場所	ひたちなか市役所 第3分庁舎 防災会議室3
出席者	<p>【委員】</p> <p>ひたちなか市PTA連絡協議会 女性ネットワーク委員会副委員長 及川 敦子 ひたちなか市立幼稚園PTA連絡協議会会長 林 郁恵 社会福祉法人潮福社会 柳沢保育園 主任保育士 宮木 幸代 社会福祉法人平磯保育園理事長 川崎 誠 学校法人永山学園理事長 永山 芳和 子育てサロン「えがお」代表 広瀬 久江 学識経験者(学校長・幼稚園長経験者) 関山 彰夫 ひたちなか市連合民生委員児童委員協議会 湊第1地区民生委員児童委員協議会会長 岡田 宣捷 ひたちなか市自治会連合会副会長 高橋 收</p> <p>【事務局】</p> <p>福祉部長 高田 晃一 福祉部福祉事務所 所長 大山 文朗 福祉部福祉事務所 児童福祉課 課長 井上 亨 係長 沼田 貴志 係長 佐藤 洋介 主任 萩野谷 友子 教育委員会事務局 学務課 課長 箱崎 勝子 青少年課 課長 堀江 貴美代</p>
会議次第及び会議の公開又は非公開の別	<p>1 開会 2 会長あいさつ 3 委員及び関係職員の紹介 4 報告事項 (1) 平成27年度における保育需要及び受入体制について〈公開〉 5 協議事項 (1) 子育て応援シンボルマークの選定について〈公開〉 (2) 子どもの居場所に関するアンケートについて〈公開〉 (3) その他〈公開〉 6 閉会</p>
傍聴者の数	0人
会議資料の名称	<ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度第1回ひたちなか市子ども・子育て審議会次第 ・平成28年度ひたちなか市子ども・子育て審議会委員名簿 ・平成27年度における保育需要及び受入れ体制について(資料1) ・子育て応援シンボルマーク募集作品一覧(資料2)

	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て応援シンボルマーク採点（資料２－１） ・市報ひたちなか平成２８年４月２５日号５面（写し） ・放課後の子どもの居場所に関するアンケート調査票（資料３）
会議録の作成方法	要約筆記
そ の 他	

【審議内容】

1. 開会
2. 会長あいさつ
3. 委員及び関係職員の紹介
4. 報告事項

(1) 平成２７年度における保育需要及び受入体制について

事務局より概要説明を行い、その後質疑応答及び意見交換を行った。（資料１）
 質疑応答及び意見交換の主なものは次のとおり。

【委員】 資料１の「空き待ち児童数推移」において、１２月の児童のうち那珂湊地区と勝田地区の人数は如何か。

【事務局】 資料１の入所児童数推移の最多時点とバランスは変わりなく、勝田地区が２１名、那珂湊地区が４３名である。勝田地区と那珂湊地区でのアンバランスも若干あるが、昨年度の那珂湊地区の受け入れ体制を調べたところ、平成２６年度は、入所児童が最多の月で、定数よりも１４人分空きがある状態であったが、平成２７年度は逆に弾力化により定数よりも２１人多く受け入れており、一概に那珂湊地区の保育需要が少ないというわけではなく、園に偏りが出ているというのが実態である。

【委員】 弾力運用とは１年単位で考えているのか。例えば今年は１００人定員のところを１２０人受け入れるとなれば、１２０人分の施設や人員配置を用意しなければならないと思うが、３年後に入園児が１００人になった場合、保育所はどのように対応をするのか。

【委員】 私が運営している園では、今のところ弾力運用を実施しており、１２０名定員のところを昨年度は１４３名、１１９％の受け入れをしている。別の園も９０名定員のところ１００名を超えて受け入れており、両園合わせると実際２１０名定員のところ２４０名を超えて受け入れており、これが数年続いている。特に後者は、当初６０名定員として始まったところが、７０名、９０名と徐々に定員を増加させている。一方前者は、１５０名定員としてつくった施設だが、４歳～５歳になると小学校の付属として公立幼稚園へ行くという流れがいつの間にか定員を割るようになり、一時期定員を１２０名、さらに９０名に下げ、また盛り返ってきて現在１２０名という定員になっている。当時は幼児施設設置協議会に諮り、実情に合わせて定員を下げた。一人あたりの入所児童の保育単価がある

ため、それが反映される。

【事務局】 定員は0歳児から逆ピラミッドのようにならない。下段が大きくなれば、上の学年も大きくなる。資料1からわかるとおり、今は0歳児～2歳児の早い段階で子どもを預けたいという方が多く、これが保育需要の伸びにつながっている。ただ、市が実施したアンケート調査では、全体の約25%が3歳児までは自分で育てたいという思いを持っており、本来自分で育てたいが、預けなければならない社会情勢となっているとも言える。また、35%が祖父母等に子どもを預けることができないという結果も出ており、「働くこと＝保育所入所」であるため、預ける年齢がどんどん若年化していることと、0歳児のうちから申し込まないと保育所に入れないなどとメディアでも言われており、できるだけ早い段階から保育を確保したいという流れになってきているということだと思う。弾力運用については、職員配置や施設規模はクリアしたうえで受けてもらっている。定数については年度に対する縛りはない。

【委員】 一般的に0歳入所は普通考えられない。しかし現在の状況として、育児休業は満1歳になるまで取得できるが、実態は産休しか取れないような会社もたくさんある。育児休業を取得したら職場で帰る場所がないというような社会環境があり、0歳児の途中入園が多い。そのため、その枠を空けておかなければ、兄弟でも下の子（0歳児）が入園できないという現象もできてしまう。実際に勝田地区の保育所に兄弟が入園しているが、勝田地区の保育所はほとんどいっぱい、生まれて間もない弟妹が同じ保育園に入れず、那珂湊地区の保育園に来ている例もある。東京だと兄弟が3人いると3人とも違う保育所ということも珍しくなく、ひたちなか市も段々都市化しているような状況になっている。

【会長】 そういったことは資料の数字だけではわかりづらい。小学生であれば、人数の増減は想定できるが、保育所の場合は子どもの数が減っても保育需要が増えている。予想が非常に難しいし、数年後にどうなるのか、保育士の配置数なども含めると難しい。

【委員】 幼稚園だと認可定員というものがあり、認可定員変更は県の私学審議委員会に諮らなければならない。もちろん定員を守らなければならないというのは割合縛りは緩いが、定員をある程度超えるとペナルティがあり、補助金を減らされてしまうため、みんな認可定員を守っている。そのため、幼稚園のピーク時にももらった定員をそのまま保持しており、当園は実際の入園児の倍くらいは認可定員がある。そのため、保育所の弾力的運用という意味がそもそもわからなかった。

【事務局】 人口の推移についての資料は以前の審議会でも提示させていただいたが、国勢調査の関係で平成28年4月の状況がまだ示されていない。それが示されれば、子どもの数がどのように減ってきているのかをもう一度評価できる。それにより現状で足りているのか、弾力運用が必要か、私立幼稚園の力を借りるのか、様々な選択肢を検討する中で、保育需要が今後どのように変わっていくか見込まなければならない。

【委員】 全国私立幼稚園連合会の会議で、私立幼稚園で小規模保育をできるところはや

ったほうがよいという話しが結構出ている。私どもの幼稚園で、預かり保育は毎日40人くらい利用している。預かり保育を利用している子の下の子について保護者に聞いたところ、保育所に預けているとのこと。下の子を保育所に預けて上の子は幼稚園にというのであれば、私どもも小規模保育の実施を考えられないこともないと思っている。

【事務局】 子どもの集団保育として考えると20人未満というのは今まで認可してこなかったが、都市部では集団保育を実施するような土地や建物を手にすることができないために、小規模保育に頼らざるを得ないという状況がある。ひたちなか市も需要量は伸びるが子どもの数はおそらく減少する。現在の計画では平成27年度は平成26年度より児童が93人減少すると見込んだが、実際は59人の減少だったため、34人分見込み違いがあった。もしかしたらその先も想定より減少しないかもしれない。しかし、今現在、保育需要として非常に伸びているのは3歳未満児であり、その部分について既存の民間保育所での受け入れが床面積や保育士の問題など課題もあり、こういった形が子どもたちにとってよいのか判断するためにも、しっかり保育需要を見込む必要がある。

【会長】 保育士の立場から、実際お子さんを受け入れてほかに委員に知っておいてほしいことはあるか。

【委員】 0歳児の見学者が毎日のように来ている。育児休暇取得から1年で復帰しなければならぬということで、6月に入ってから毎日のように午前午後と見学者が来ており、子どもの年齢も4ヶ月、8ヶ月、9ヶ月という方がほとんどで、復帰すれば保育時間も8時から6時までという形が今は非常に多い。0歳児の土曜日保育が今年から始まったが、今は3人くらい来ている。平日も1歳児が今年には特に多く、夕方6時を過ぎても8人か10人くらいはおり、職員のその日のやりに苦労している。

【会長】 非常に難しさがある。保育需要については今後も継続して協議する。

5. 協議事項

(2) 子育て応援シンボルマークの選定について

事務局より概要説明を行い、各委員よりそれぞれのシンボルマーク応募作品に対する意見をいただき、協議を行った。(資料2, 資料2-1)

まず、各委員に応募作品の中で特によいと思うものを第2位まで挙げてもらった。

委員	1位	2位	意見
A	2	1	・直感では2番がシンプルでよい。 ・ひたちなかの方が作成した1番もよい。
B	1	6	・2番は何かで見たことがあるような気がするので調べてもらいたい。 ・ひたちなか市の方が作成した1番を1位としたいが、もう少し丁寧な形に修正してほしい。

C	1	6	・子育ては家族で行うものであるため父母が描かれているもの、それにサポーターが入るとよい。
D	6	7	・それぞれの作品のコメントをみると、6番が一番よい。 ・初見では2番の埴輪が子どもを抱いたイメージには近いかと思ったが、どこかで見たことがある気がする。本当はこれにしたい。 ・埴輪をモチーフにしているし、ひたちなか市の「ひ」の形をとっているし、「地域ぐるみでの子育て支援」というイメージで、マークとしては7番が2位ということにしたい。
E	3	7	・3番がシンプルでよい。
F	7	6	・7番は全国的にも珍しい埴輪をモチーフにしてよく描かれていると思う。
G	6	5	・ぱっと見てお父さんとお母さんと子どもがわかりやすいので6番を1位としたい。 ・お父さんとお母さんがにこにこして子育てするイメージで、色合いも好みであるため2番目に5番。
H	6	7	・1位が6番、2位が埴輪にも見えなくもない7番。
I	6	4	・6番が1位だが、地域ぐるみということで、周りにも何かほしい。 ・個人的に4番が好き。

【事務局】 1位を2点、2位を1点として計算したところ、6番が11点、7番と1番が5点、そのほか、2番、3番が2点、4番、5番が1点となっていたが、協議のうえ、審議会としての1位と2位を決めてほしい。

【委員】 1番を選んだのは、ひたちなか市の方が描いているから。

【委員】 これをベースとして、みんなの知恵を入れながら多少修正してもらおうということではよいのではないか。

【委員】 2番が一番シンプルで目に付いた。他のものと似通っていても同じでなければ大丈夫なのか。

【事務局】 事務局としても十分確認するが、調べきれないかもしれない。本人と面談する中で確認したい。あまり類似しすぎてなければよいのではないかと思う。

【委員】 もしも類似しているようなものがなければ、2番がよいと思う。お母さんが子どもを抱いているイメージがとても優しそうでよい。

【会長】 具体的に決定したマークはどこで使うのか。

【事務局】 今後実施する子育て応援企業認定において、認定された応援企業に活用いただいたり、市報や児童福祉課が発信するものに入れたり、イベントで活用するなど、

方向性はいくつか考えられる。職員の名刺に入れるというのものもある。

【会 長】 いくつか意見が分かれているが、委員としてある程度意見を固めていきたい。もう一度意見を伺うが如何か。

【事 務 局】 協議会の意見として上位2～3位までを決めていただきたい。その中で市が最終的に決定する。

【委 員】 ひたちなか市の方の案に絞ったほうがよいのか。

【事 務 局】 そのようなことはない。

【委 員】 今日決めてすぐマーク化するのか。

【事 務 局】 類似についてはしっかり確認したい。順番に連絡を取り、ヒアリングを実施したい。子育て応援企業認定については、9月までに発信できれば考えている。

【会 長】 2番を類似性が強いという印象で抜いてしまうかどうか。

【事 務 局】 類似性は他の作品も否定できない。若干の修正が入るかもしれないということを考慮していただき、どれも横並びのなかで選んでいただきたい。

【会 長】 6番は次点として残すとして、1番、2番の地元の方の中から1位を選んでみてはどうか。

委員の同意を得て、順番に1番と2番のどちらがよいか意見を述べてもらった。

委員	どちらがよいか	意見
A	2	
B	2	・簡素化できるのは2番。よく調べていただきたい。
C	1	・2番はどこかで見た感じだったからはずして考えていた。自分は1番がよい。
D	2	
E	2	・シンボルマークとして考えるならばシンプルなほうがよい。
F	2	
G	2	・マークとして考えれば2番の方がよい。
H	2	
I	2	・1番の絵の具で書いた感じを残したままにするのにもよる。はっきりとした色合いでわかりやすいのは2番か。

1位を2番、2位を1番、3位を6番とした。

(2) 子どもの居場所に関するアンケートについて

事務局より概要説明を行い、各委員より意見をいただき、協議を行った。(資料3)

【委 員】 若い母親はほとんど働いており、子どもにお金を渡して遊ばせ、親が帰ってくるのが午後6時過ぎ、という家庭が多い。

【事 務 局】 今回の調査は1人の子どもに対して1枚記入していただく。市内全ての小中学校で実施するので、各学校の傾向が見えてくることを期待している。例えば、概

ね午後6時までを平日の放課後と規定しているが、誰と午後6時までいるのか、そのとき大人の介在はあるのか、大人が帰ってくるのは何時か、低学年でも親の帰宅が遅いといった現状があるのか、それらを把握するとともに、地域性がでてくるのか、それにより見えてくる課題を捉えたいと考えている。

【会 長】 地域の中で、いわゆるお金で解決している、ということが気になるのか。

【委 員】 そういった家庭が一番多いのではないか。両親が帰ってくるころにはもう夕ご飯を食べ終わっており、子どもと両親が話しをする時間がない。やはり基本的な家庭の教育が必要だと思うが、それがなっていないように思われる。

【会 長】 アンケートによりそれが浮き彫りになればよいのではないか。

【事務局】 小学校単位でそのような課題が浮き彫りになり、小学校や幼稚園のPTAなどの地区の中から、この地域には子どものための居場所が必要だという意見が盛り上がるのであれば、それをしっかりと議論をしていきたい。ただし、そのとき市役所が児童館のようなものを作って提供していくということが、全ての小学校単位でできるのかという問題もあるため、地域の介在も含めて、行政と地域と一緒に、子どもと子育ての家庭を支えていくといった仕組みができないかどうか、その第一歩として実態を把握していきたい。

【会 長】 「Q3. 平日の放課後、お子さんは主に誰と過ごしていますか。」について、中学生は8割から9割が部活動となるので、項目カは、部活動は学童クラブ等と別にしたほうがよい。

3月の協議会で学童クラブについて協議したが、4月から約3ヶ月経ち、特に困ったことや、大変だったことは何か。

【事務局】 学童の利用者数は年々増加しており、昨年度に比べて150名程度増え、今日現在1,931名となっている。入会待ちがいる学校も昨年度と同様にある。待機児童がいる学童で、5月頃利用が少ない保護者に電話で問い合わせをしたがその後出席率が上がった。利用しない児童にやめていただくよう通知を出すという噂が流れたらしく、現在待機がいる学童の出席率が非常によい。午後2時半や午後3時まで仕事をしている母親は、平日は学童を利用する必要はないが、夏休みは日中預ける場所が必要ということで、現在夏休みの利用希望状況を各学童クラブに調査を依頼している。長期帰省などにより通常夏休みの利用率は下がるが、今回は先が読めない。待機している保護者に夏休みになったら入れるかもしれないのでお待ちいただくよう案内をしているが、利用できるかどうか今のところ何とも言えない。夏休みだけでも利用できないか、という問い合わせは頂いている。

【会 長】 一番子どもの行く場所として学童は高い割合を占めると思うので、このアンケートが学童についても役に立てばさらによい。

【委 員】 アンケートはいつ頃やるのか。

【事務局】 夏休み前に実施したいが、日程的に厳しい状況である。できるだけ早く実施したいと考えている。

【委 員】 佐野地区では小中学校持ち回りで地域懇談会を実施している。小中学校の先生方にも集まっただき、小学生の通学路や下校時の安全性など話し合っている。

そこで提示できるとよい。

- 【事務局】 量が多いため集計に時間がかかる。結果が出たら審議会でお示ししたい。
- 【委員】 できるだけ早い段階でできたらよいが、学校側が日程的に厳しいかもしれない。
- 【委員】 目的として子どもが放課後どのように過ごしているかをシンプルに把握したいということだが、学童クラブに行っている子どもと行っていない子ども、部活に入っている子どもと入っていない子どもとで分けて把握しなければ、見えてこないこともあるのではないか。学童利用者を分けることで、学童でこんなふうにご過ごしてほしいという情報が出てくれば、学童の活動内容を見直すことができる。また、保護者の希望が、塾や習い事に通ってほしいという意見が多かった場合、市としてどのような対応をするのか。
- 【事務局】 検討させていただくが、調査として同じ質問でないという意味がないところもある。今回課題としているのは、小学生にあっては、学童クラブに行っていない子どもたちがどのように過ごしているかを知ることであるため、むしろ学童クラブに入っていない方に対するアンケートを実施した方がよいかもしれないが、今回のアンケートについては一律同じ内容での実施が当初の考えである。
- 【委員】 子どもたち本人に対してのアンケートを実施してはどうか。子どもたち自身が何したいのか、子どもたちの意見の方が大事なのではないか。
- 【事務局】 低学年は記入が難しいので、親が記入してもらうことを前提に子どもに聞いてもらうということが可能かどうか。
- 【委員】 小学校3・4年生になったら自分の意見を持つ。親に放って置かれている、と言うはずである。
- 【委員】 最後に大人の意見と子どもの意見を自由に書いてもらうというのはどうか。
- 【事務局】 自由意見も非常に大切である。子どもの自由意見を書く欄を作り対応したい。アンケートの内容についても、確かに学童に入っている方にとっては書きにくい部分もある。アンケート実施が少し遅れるかもしれないが、各委員から頂いたご意見を元に検討させていただきたい。
- 【会長】 13,000件~14,000件になると思うが、アンケートの集計は誰がやるのか。
- 【事務局】 職員が集計を行う。
- 【会長】 親に「どのように過ごしてほしいですか」と聞く質問の意図は何か。
- 【事務局】 実態はどうか、それは保護者が望んでいるものなのか、そこにギャップがあるのかを聞くためのものである。それにより何が必要なのかというところにつなげたい。
- 【委員】 「どのように過ごしてほしいですか」というのは、実際、放課後に子どもが何をしているのか分からなければ書けない。分かっている保護者が多いということでは、分かった後でなければ何を書くのか。親の願望を書くということなのか。
- 【事務局】 今後、市の施策として子どもの居場所を作るためのヒントにしたいので、どういった願望を持っているのかという解釈で間違いではない。
- 【委員】 子どもが実際何をしているのかを把握し、それからどう過ごしてほしいのかを

聞く、という結びつきで考えれば理解できる。そこをつなげないと意味がない。

【委員】 アンケートは学校から保護者に渡すのか。

【事務局】 学校に配布を依頼し、子どもを通じて保護者に渡し、保護者に記入してもらう。

【委員】 子どもに対して何もしておらず、把握もしていないのに書けるわけがない。

【委員】 親が書くときに子どもに何をやっているか聞くしかないのではないか。

【事務局】 選択肢の中に「把握していない」というものもある。もしかしたら回収率が低い地区もあるかもしれない。

【委員】 親は勤めに一生懸命で子どものことを把握していないという意見もあるが、しっかり学童に入れて安心して働いている方もいるし、夕方になったらすぐ学童まで迎えに行っている方もいる。

「どのように過ごしてほしいですか」という質問の選択項目は、全て「ほしい」としてはどうか。「ほしい」と書くと親の願望になってしまう。特に多かった結果、今後そういうことを提供するのかと捉えられるのではないか。

【事務局】 委員の皆様のご意見を整理し、あらためて検討させていただく。このアンケートの意図として、子どもの居場所について議論するための資料とするところである。市としてやりたいことは、子どもの居場所をどのように考えていくか、学童クラブ、保育所、子育て支援センターという流れで今まで検討してきたが、それらに行かない方についての議論をしてこなかったというところに反省があるため、まずは実体把握に努め、地域ごとに課題が明確にできるように取り組んでいきたい。皆様のご意見を踏まえたうえで、もう一度提案させていただきたい。

【委員】 提案していたら実施が遅れるだけである。後は事務局にお任せする。

【事務局】 今年度中には必ず実施する。1学期中の実施を目指す。夏休み前は学校側の日程として難しいと言われる可能性がある。夏休み後になる場合は、日程に余裕ができるため、じっくり検討し委員のご意見も伺いたい。遅くとも2学期中には実施したいと考えている。

(3) その他

【事務局】 次回の開催日時は未定だが、保育需要についての検討や、シンボルマーク選定結果の報告などを行うため、後日改めて日程の調整をさせていただく。また、委員の任期が7月29日までで満2年を迎える。7月早々に各団体等に委員推薦依頼をお送りするのでよろしくお願いしたい。

6 閉会